

第5回教育のあり方検討委員会記録

- 1 日 時 平成30年8月21日(火) 14:30~16:45
- 2 場 所 矢崎部品(株)ものづくりセンター
- 3 出席者 島田桂吾、野村智子、佐藤利彦、池ヶ谷祐太、橋山妙子、今野英明、
中島佑実、石井眞澄

4 協議事項議事録【概要】

島田委員長

人づくりは学校だけでなく、企業でも行っていくことが改めて確認できた。昔の企業教育は技術やノウハウを伝承していくというイメージがあったが、それだけではなく、海外の人の生き方や、日本にいる人たちのサマーキャンプ等の経験も通して、人格形成に関わるような人づくりをやっていると思った。

第4回で出てきた「キャリア教育を軸にした小中一貫の人づくり」というところで、学校を出た後でも、人格形成の機会があり、それは形が変わっても、どう生きていくかということを中心に考えていくということでも、これからの検討にはよいものだった。

工場見学では、AI等機械がやること、機械ができないことは何か。と思って見ていたが、最初の部分は完全にオートメーション化されていたが、最後の部分、配置のようなところは人がやっていた。完全にオートメーションにできないわけではないが、あえて人がやることで雇用創出につなげているという話だった。

そうした支えが、目に見えない部分をつくったり、新しい商品をつくったりというときに人の力が必要。そんなときに、どんな力を育てていくのか、というところは企業としても考えているし、企業に入って新たなモノを創り出すには、特に義務教育段階ではどんな方向性があるのかということをつなげて考えることもできるといながら見させてもらった。

教育長

ものづくりセンターで開催できることに感謝する。大石さんの全面的な協力ありがとうございます。

山崎こども財団のサイエンススクールで子どもたちが大学の授業をやりにいった。子どもたちはすごく興味を持って、話を聞き、実験をしていた。

日本は資源の乏しい国で、優れた技術でいい製品をつくって、国を豊かにすることを繰り返しているわけですが、これからも国が反映するためには、自分たち、その次の世代と、さらに力を磨いて、常に世界をリードする日本であってほしい。それには、教育の力は大きいと思っている。それぞれの分野で力を発揮していくためには、今後の教育をどうしていくかは大事で牧之原市でも検討を重ねてきたが、今日は5回目ということで、いよいよ施設や学校再編に入る。学校施設にあっても単に子どもたちだけがいるのではなく、い

ろいろな人との関わりを通していい教育がされるのだと思う。今日もいろいろな視点で意見を出してほしい。

前回の振り返り

島田：前は、これまでの議論や視察を踏まえて牧之原市としてどのような学びや体制にしていくのが望ましいかについて協議しました。そして概ねの方向性として、「キャリア教育を軸にした小中一貫教育を進めること」「社会との協働からコミュニティスクールのような制度をうまくつけていく」ということを共有しました。この間、事務局で教職員を対象に当会の検討経過を説明して頂いていますので報告してください。

【事務局：7月から9月まで市内12校を巡回し、教職員を対象に「あり方検討会の経過説明」を行っている。前半を終えて先生方からの意見などを報告した。】

島田：報告有難うございます。前半を終えて先生方からは「現状や方針は曖昧にせず具体的に示してほしい」「地域への説明を丁寧にする」「進めるに当たり先生への負担が大きくなるように配慮してほしいこと」「将来のことなので中堅職員が議論する場の設置」などの意見があったということを確認しました。後半の報告も次回をお願いします。

1 施設について

島田：これまで学びのコンセプトや内容について議論してきたが、本日は、この学びを実現するためにはどういった施設や機能が望ましいか議論したいと思います。

【事務局から参考資料を確認】

橋山：図書館は充実した方がいいと考える。視察先の充実ぶりや牧之原でも読み聞かせや朝読書などに取り組んでいる。子供のころから図書館に足を運ぶ、本を通じて新しい考えに触れる習慣を身に付けてほしい。

石井：これからの時代ICT教育が大切。各教室で機器が使えるように充実させたい。

中島：本もあり、PCもできる。情報をインターネットや本から拾ったりできる。いろいろな知識を集めたい子どもが自由に動ける空間。そこに地域の人が入って来れば、触れ合いを通じて教えてもらえるかもしれない。義務教育学校という9年間のまとまりがあり、その敷地に大きな図書館があって、地域の人が自由に入ってこれる

空間が必要ではないかと思う。

今野：キャリア教育を軸にした場合、社会との交流は大切。社会との接点大きいものや他の公共施設と複合化し充実したものにする。学校図書館と市民図書館を併用すれば大人も子どもも学べる。

大石：これからの時代、ICTを通じた情報処理の充実は必須。但し、同時に技術室、家庭科室など、実際に物を持って切ったり、打ったり、肌に触って物をつくることも停滞させずに残して行かないと行けない。新しい何かを作るときに、昔の腕時計やからくり人形がすごく参考になる。自分で作ったり分解したりという施設も大事にしていかないと行けない。

池谷：ICTや図書館の充実が必要。但し施設を変えなくてもできることもある。それはしくみや意識を変えること。学校は誰もが学びの場だと思っているので、(しくみを変えて)子どもたちの学びの場だけでなく、他の人の学びの場にもなってもらえればと思う。

島田：学校図書館やICT整備の状況はどうなっていますか

学課長：現在、図書館司書は5人で何校かを兼任している。ICTは現在、段階的に各教室にPCに対応したプロジェクターとスクリーンを整備している。その後タブレットを配置していく計画。

佐藤：図書館は同感です。市、学校それぞれに図書館があるが、一緒にしたらどうかと思う。生徒も使えて地域の人でも使える。その方が充実した図書館にできる。そこにはICTもあり、大人も子どももそこにいけば調べ物ができる場所。公民館が隣接していれば、ちょっとした集まりやイベントもできる。学校と地域との絆が間違いなく深まる。一方、既に空き教室はあるので、新しい物ができるまでにはそこを利用して何ができるかを考えていかないと行けない。新しい物ができて急にということは難しい。空き教室はいろいろな勉強に使える。外国のように、いろいろな専門の部屋が充実してあって、そこに子どもが移動して授業を受ける。キャリア教育を視野に入れると子どもが選択して、考えてということができる。

野村：子供も親も学校は新しくきれいな方がいい。校舎も机もイスも同じ。視察した天沼小学校は中身もそうだが施設がきれいだった。こういう環境で勉強すると子どもの意欲が違うと思う。また、視察を通じてこれからはプログラミング教育をやっているかと時代に追いついていかないと行けないということを実感した。ICTが牧之原市に入ってきているが、使いこなせる教員がいない。ICTの支援をしてくれる人が司書のように来てくれれば進んでいく。図書館についても、バスを借りて小2で市の図書館を見に行くが規模が小さく残念な感じ。一体化にしてくれれば予算も集中できてよい。福祉施設も近くにあれば高学年が見に行くのでありがたい。小中一貫のキャリア教育を進める上でも、視察先の意見も、分離型は不便、併設型が望ましいとのこと。当市が新たに進めるなら一緒にした方が子どもにも教員にも良いと思う。

今野：防災面。もしものときには、そこに逃げる。バリアフリーで市民の避難生活の場としての機能も備わっている。防災用品も備蓄された場所でもあってもらいたい。

野村：そもそも立地を選べるなら地震や津波が来ても大丈夫な場所にしてもらいたい。そうすれば、保護者にとっても安心できる。

大石：視点は変わるが、児童生徒のメンタルのケアをする施設が必要ではないか。私の会社では、更生棟の一角にメンタルの相談室がありに、そこにコンサルタントがいて、いつでも相談できる。

島田：市の現状はどうですか

杉山：スクールカウンセラー各小学校を月1回巡回している。中学はもう少し頻度が高い。スクールソーシャルワーカーは市に2人いて、週に2日、各中学校を拠点にして巡回している。

大石：子供だけでなく、先生も相談できるところが欲しいと思う。

佐藤：先生は年に1回、法定のメンタルチェックをするくらい。

石井：先生は孤独。小規模学校は特に学年一人だからちょっとしたことで相談できる人がいない。

野村：確かに一任職は感じるかもしれないが、その場合は他の学校の人に相談するなどしている。

石井：先生が困っているように見えるけど、どうしているのか。

島田：事例として、空き教室を解放して、教員が集まって、お茶を飲める場所をつくっているところもある。目的はメンタルヘルス。こどもたちのための環境も必要だけど、先生のための教育環境も必要。

石井：複合化するとセキュリティにどう対応するかが大変だと思う。それに対応した施設にしないといけない。

島田：埼玉県の事例では、セキュリティを分けている。可動式の壁で仕切るということもある。地域の人が入ってくるから安全面が保てるということもある。

島田：コンセプトとして、「地域社会の人も使えるような施設(図書館やプールの共有など)」「防災面の充実(立地や避難所としての設備)」「子供たち学校の先生も使いやすいICT」「(技術や家庭科室等)ものづくり体験」「規模の大きさ、新しさ、最新性」また経過措置的に「空き教室の利用」の意見が出ました。

2 学校規模

【事務局から参考資料を確認】

島田：資料2-3について補足します。学校の先生の数は多くの外国は子どもの数で決める。日本は学級の数から先生の数を決めている。1学級は40人の定数は昭和55年から変わっていない。それを補う目的でチーム学校という名前を出して、先生以外の人を非常勤で増やして学校を支えようとしている。学級の数には3段階ある。複式、

単学級（40人以下）、複数学級。みんながどう考えるか。安全面、老朽化のことも含めてどうするか。時期も含めて。

まず最初に、学級数について議論をお願いします。単学級でいくのか、複数学級でクラス替えでいくのか議論します。

野村：単学級も複数学級も経験しました。双方にメリット・デメリットはあるが、一定のクラス数があることは子どもにとっても先生にとってもメリットが大きいと思います。先ほど相談員の話が出たが、そういった相談員も学校数が少なければ常駐できる。また、単学級では相談する人がいないと思った。新採で入ってもベテランと同じように学級を任される。同じように子どもを育てるのは大変。ベテランと一緒にやっていければ先生にも子どもにもいい。小規模は手厚いケアが受けられる、先生との距離が近いということはある。ただ、人間関係が壊れた時には本当に厳しい。クラス替えはありがたい。複数学級の方がありがたい。

佐藤：学級の数で考えると、小中併設型。別々でなくて近い方がいい。複数学級の方がいいと思う。単学級に勤めたことはないので、実際には分からないが、その学校にその教科を教える人がいない。学校またいで教えにいかないといかない。一緒のところだったら小中またいでいくのはメリットがあるが、遠いと大変。複数学級の方がメリットが多い。小さいと先生の負担が多い。小さくても先生のやることは変わらない。一人の負担が増え、事務仕事に追われるとよくない。広い世界に出て行ったときのことも考える。中学校に上がってきたときも単学級から上がってきた子の方を心配でみる。理想的には複数あって小中近くにあって、先生も行き来ができるのが一番いい。

島田 ありがとうございます。現場の先生の立場からの意見は、双方とも複数学級を目指すべきだ。先生も多くいればベテランの先生から指導が受けられる。人間関係の調整を考えればクラス替えが可能な学級数がいい。また中学校に入れば大きくなるものの小中の連携を考えたときには近くにあった方がよい。

続いて保護者や企業の立場からの意見をお願いします。

池谷：複数の方がいい。先生にとってもいろいろなメリットがあるのかと思う。子ども自身はほかの世界を知らないからどっちでもいいかと思う。これから合意していくことを考えると、市の方針は方針として、雲南市のように、実際にどうするかは地元で決めるという方法がいいかと思う。

大石：自身の小中時代を振り返ると6～8クラスだった。単学級で教えるのは中身濃くていいが、それ以外に部活動での先輩との関係、運動会などのイベントなどでの勝負の大切さなど、勉強以外のところが大事だと思う。複数学級というか多くの仲間がいた方がいろいろなことを吸収できる。

今野：自分は単学級の経験がないので、イメージがつきにくい。ただ片浜小学校が相良小

学校に統合されたあと、片小の子に聞いたら、相良にきてよかったとの感想だったと聞く。100人いたら100の可能性にであえる。複数学級の方がいいと思う。子ども自身はそんなに気にしていないのかもしれないが、多くの人とのかかわりの中で将来にむけて自分の生き方が広がっていく。人口比率と耐用年数を考えると、そのままはどう考えても無理。予算面でもすべての建替えは無理。

中島：子どもの数は多い方がいいと最初から持っていた。自分の子どもが単学級で9年間同じ子で過ごすという環境だったので不安に思っていた。知らない人にたくさんあって、どうするかというところは大事。クラス替えは子どもも先生もドキドキするが、これは単学級ではできない経験。複数学級だとクラスを配慮することでカバーできるが単学級だと選べない。予算面を考えても、施設を考えても、修繕にもこれからお金に係るので、修理にかかるなら、なるべく早く、集約して充実した素晴らしい学校を新設した方がいいと思う。ほかの人からあったが、施設だけでなく集約することでカウンセラーなども何人かいてもいいと思う。合う合わないがあるので選べるのはいいと思う。保育園に勤めているが、5歳の子どもでも50人位の他の子のことを「こういう子だ」ということを話すことができる。他の人を理解する力がある。多くの人のことを分かることができる。そういう経験から人との距離感を覚える。小中から多くの人の中の考えの中で育つのがいいと思う。

石井：仕事柄学校に行く事もあるが、川崎小学校などは浸水域にあり危険だと思う。レベル2の地震に対応して訓練をしてはいるが、新しい学校を作るならそもそも浸水域に学校を立つべきではない。施設についても老朽化に愕然とした。けがしてからでは遅い。危険性を保護者に伝えると建て替えないといけないということが出てくるのではないかと。海岸部に大きな学校が多いが、どこかをどこかと統合するのではなく、安全面を考えて安心できる場所に、集約して建てた方がいいと思う。そうすれば単学級も解消される。

大石：メンタル面で、クラスの数というより、多様な考えを持った多く仲間との交流ができた方がいい。多くの友達を作った時にはけんかしながら、声かけながらやっていく。ICTが進むからこそ、いろいろな考えを持つ人と人とが対面して生で人間関係を学ぶことを大切にしたい。安全なところに新しいものをつくって、大家族でやるというのがいい。

橋山：単学級は経験がないので聞いただけのことしか分からない。子どもはあまり単学級でも複数学級でも関係ない。学年が違って男女の違いもあっても仲良くやっている。ただ、大きくなるとだんだんグループ化してくる。少人数でグループ化になるとグループを作れない子も出てくる。それでも複数ならクラス替えをすることでリセットでき、子ども自身の中の経験値が積み重なる。子どももいろいろな先生の出会いの機会から自分がどういう大人になりたいと考える機会にもなる。親もいろいろな出会いがあることで子どもの成長を見ることができるのがいい。

島田：ありがとうございました。全員から複数学級がいいという意見が出ました。

キャリア教育を軸にした一貫教育を進めるためには、子供にとっても先生にとっても多くの仲間や複数の学級数が必要。ICT が普及し機械を相手にしていることも多くなる時代だからこそ、多くの友達の中で、生の関係を増やすことで自分の生き方が広がっていくというメリットがある。

もう少し掘り下げて、なぜ、いいのか、みんなにわかりやすい理由、価値づけを考えていきたいと思います。

野村：メリットは、多様な価値観に触れる機会が出るのが一番。また、人数が多いと学校に活気があるというのがある。片小の親が相小の運動会を始めて体験して感動したと聞く。単純に数百人の人がいて学級間で競い合ったりいろいろなドラマを味わえる。

佐藤：4つの小学校から一日体験入学にくるが、大きな行事になってしまっている。それは小学生が中学校を全く知らないから不安なんだと思う。距離も小中の文化の違いもあるし、中一ギャップも確かにある。統合は、地元で不安を抱える人もあると思うが、だからこそメリットを出していく。例えば小中一貫は中学校の存在が近くなり敷居が低くなることで不安を軽減できるなど具体的なメリットを探していったらどうか。

島田：キャリア教育の視点から多様な価値観、同じ学年同士の横のつながり、中学校の存在を身近にするために、小中の距離を近くすることも必要というご意見でした。

それでは安全面について。最近の裁判では、子どもの命を守るための行動をどれだけとったか。判断には予見ができたかを見る。例えばハザードマップ。そこで予見できたかを判断する。分かっているのにしなかったということは敗訴。

したがって回避には時間がかかるとは思うが、津波、老朽化対策などに取り組もうとしたのかどうか問われる。そういった意味でも、いつころまでに整備するかという計画が必要。整備には7~10年程度かかる」と聞きますのでその辺も踏まえていつころまでに整備するかを議論して頂きたい。

石井：東海東南海地震想定で、牧之原市で亡くなる人は13000人と予想されている。そのうちのほとんどが溺死。これが子どもだったら本当に忍びない。なるべく早めにやってほしい。子どものためには、なるべく早くに安全なところに。教育施設だけでなく市として防災にどう対応しようとしているのか問われる。高台に移転するのは学校だけでなく、災対本部となる庁舎はどうするか。小中学校がそこに移るなら市民も移る可能性がある。併せて都市計画もつくっていく必要がある。

大石：早期の整備が望ましいが、国の予算は、どのくらい前から申請できるか。

教課長：補助金は額が多ければ早めに次年度分を基本的には受け付ける。国も来年のものをくむ。早めに相談する。

大石：企業の予算取りは速くやらないと費用対効果を見てやるので。7年後とかそんなに

長期的にやるというのが考えられない。何が起こるか分からない。短いスパンで決断して、やっていく。中期の3～5年で考えていかないと時期を逃す。

島田：できるだけ早くということが両委員からの意見でしたが皆さんいかがですか。

行政の場合はトップダウンだけでは押せないの、計画を立てたがずると長引いてしまうということがまあある。例えば通学手段への不安であったりする。遠くなることに対して、基本バスになると思うが、配慮してほしいことはあるか。

橋山：学校の集約されると遠くなる人が多くなると思う。保護者はバスがないと自ら送迎しなければならなくなり不満になる。公共のバスもあるところとないところがある。スクールバスもどこまでの距離が対象になるのかという問題も出てくる。また逆にバスに乗ると足腰が弱くなる。雲南市の説明ではバス通でもある一定距離までは足腰のためにあえて歩いていると聞く。基本は歩けばいい。中学生は自転車がいい。遠くなればなるほど、不満はでるが、子どもは慣れる。安全面で考えると海岸部は避けるべきだと思う。

池谷：交通はたいした問題ではない。安全面や防災の方が大事。どちらの不安を天秤に掛けるか。一番いい方法をみんなで考えればいい。

島田：国の指導では1時間以内に通えるようにとしているが、牧之原の規模からするとどこでも大丈夫かなと思う。歩く範囲で歩かせるという意見もあったが、通学路の安全面の点検が必要ではないかと思います。

続いて、今回の議論は市全体の小中学校であるが、学校組合の扱いはどうするかということがありますが、ここでは組合云々でなく小中学校の在り方を示すこととし、政治的な判断の問題でもあるので「組合をどうするかという課題がある」ということで載せていくということでもいいでしょうか。

島田：学校規模について皆さんの意見をまとめると

まず、複数学級がきちんと維持できること。そのメリットとしてはキャリア教育を軸とした小中一貫教育を進めていく中で、大勢の子ども達の多様な価値観を広げられることと、中学校の存在を(小学校の)身近にしていくこと。さらに立地については可能な限りハザードマップの浸水区域にならないところに位置付ける。また、老朽化の視点からもできるだけ早く建て替えを進めるように検討していく。通学手段は保護者の負担や安全面に配慮するということがよいでしょうか。

野村：建物はなるべく早いほうがいいのは分かるが、並行してやってほしいこととして視察先(飛島)でもあったように、箱物だけで中身がなければダメということ。キャリア教育、9年間を見据えてどういった子どもを育てるかと言うことを教員も保護者も地域もみんなが共通に理解していかないといかないのか。学校数は榛原、相良で各1校かと考えていたが、資料から2045年にはどちらも小規模校になる。だったら1校にした方がいいのか。

今野：愛知県飛島村に視察に行ったとき、この小中学校の施設がすごく良くて、牧之原

市もよいものをつくって人を集めれば(少子化は)この数字のとおりにはならないのではないか。

大石：いい学校ができて防災も完璧だったら、ほかのまちからこの市に来るんじゃないかと思う。そういったまちづくりの視点を考えれば、遠い先ではなく、人も街並みも寂れて手遅れにならないよう、できるだけ早期に学校を核とした魅力ある場所を整備することで、そこに若い人が魅力を感じて戻ってくれば人口の推移も変わってくるのではないか。総合計画審議会とここのところが繋がっているのか疑問。

石井：教育の内容と充実こそが重要。そのためにはまず先生方や教育委員会のモチベーションアップが必要だと考える。箱物だけでなく、充実した教育をしたいというモチベーションがかなえられるような市全体の意識が必要。大きく変わる時代にしっかり対応していけるように教育も変えてほしい。でなければこのまちから若者がいなくなってしまう。この新たな学校づくりも遠い夢でなく危機意識をもってみんなが持って欲しい。すぐ取り組んでほしい。

佐藤：われわれは目の前のことに追われて 10 年後 20 年後のことを意識することができない。私たちだけでなく、学校の先生方をはじめみんながこのままいくこうだということ共有する機会が必要。また、こんな学校にしたいという夢も共有することも必要。各学校の意見から 9 年間のよさをアピールしてほしいという意見があった。キャリア教育が大切だということは先生は持っている。だが、どう進めたらいいかというのが分からないところもある。キャリア教育を軸にするのは、全国的にもそうっており間違っていない。9 年間の連続した学びも同様。やっていく必要がある。先生が夢を描く。ここで話しているようなことを先生方も話し合う機会が必要。夢を語らないとモチベーションが上がらないし、考えていくことになるよということがあればいい。そのためにも市がはっきりとした方針と姿勢を示すことが大切。

島田：ここまでのことを纏めると第 1 回から牧之原でどんな子どもを育てたいのか、というところから入っていった。こういう子どもを育てたい。こういった教育をしたい。次に、そこから見ると必要な施設はなにかという話になった。皆さんが共有しているのは夢のある学校を作ること。その柱としてキャリア教育という軸とした小中一貫教育を進めていこうということになり、必要なカリキュラムをつくっていく、それがシラバスになる。次に、それに合うより良い規模や施設は何がいいかということで議論に入った。

その中で、次代を見据えたとき、子どもの学びや先生の面からも、複数学級が望ましいということが出てきた。次にどんな施設面では、安全面と防災面を軸にしながらも、人口が減っていくことをただ受け入れるだけでなく、選ばれる学校にする。魅力ある学校をつくっていくことを柱にしようということになった。但しこの会でそういう方向性は出てきたけど、いろいろな価値観を持っている中でいろいろな形があるだろうし、様々な人からご意見を頂きながら夢ある夢のある学校をどう作っ

ていくか。そのためには先生をはじめ様々な方から意見を聞いたり、情報を共有し、意見交換する場があった方がいいという流れだった。

3 意見聴取

意見交換会

【事務局から資料説明】

島田：教育委員会からの我々への諮問内容の一つに「広く意見を聞く」ということがありそれが今回の意見交換会とアンケートでどうかということなのです。まず意見交換会ですが、どういった無い様にしたらいいでしょうか。

島田：これまでの検討の流れ、目指すことを述べようと思ったが、市民はどれがいいか。

石井：これまでの議論で目標が定まっているならそれをしっかり説明した方がいい。その方がみんなが納得する。

中島：情報の少ない一般の人に「ただどうしましょう」という意見交換にすると無責任な意見になる。意見聴取にならない。

池谷：そういう目的ならやめた方がいい。ただ意見を聞くための会ですとするとあり方検討会にとって何の意味もなくなる。複数学級にするための第一歩だよという会にするのか、目的を持って臨んだ方がいい。

石井：私たちは何を聞いてもらいたいのか、何を聞きたいのか、それが一番大事なところ、目的を達成するため20分のプレゼンの内容をしっかりとしないといけない。

大石：アンケートもやるなら統計的に思いが分かればいいのではないか。

石井：アンケートは全然知らない人がやるので、その結果が本当に正しい方向なのか難しい。アンケートが今のこの時点で望ましいのか疑問。

石井：自治会等にしっかりプレゼンしてその中で私たちの考えもしっかり伝え囲いろいろな分野の人が来るのでその声を私たち委員が聞いて、どう反映したらいいか考える機会にすることが大切。

中島：広くという点では広報に載せることも考えた方がいい。

石井：ワークショップで情報を共有して核となる人にわかってもらうことが大切。

事務局：これをやってほしいということではなく、意見聴取の手法として意見交換会やアンケートがあるという提案です。この方法でこのタイミングでやるかやらないかも含めてこの回で検討して頂ければいい。ただし今学校をまわって経過の説明をしています、先生方からは市民にもっと現状と検討の結果こうありたいと考えているということ伝えてほしいとの声がありました。

島田：このタイミングで行うのは、途中段階を説明する場であり、決定したことを伝える場ではない。今までやってきたことの方向性を確認する場。私たちもいろいろな情報や議論や先進地から学んで今の考えに至った。そのことはしっかり伝え、その上で、なんでこういった考えになったのかということ丁寧説明する。これからの

価値観の変化、ICT化社会、少子化・人口減少になっていく中、再編をすることで選んでもらう学校にしたい。その中で皆さんがどんな反応をするのか確認する。

アンケートは的を絞ってやる必要があり、現段階では要検討。意見交換会はやる。

石井：自分たちが知ったことを伝えるギムはあり、何を考えたかを伝えるギムもある。やるべき。

島田：市民の人は小中一貫を見たこともない。見て感じたところを伝える。方向性はこれだと伝えて、反応を知って答申に入れ込むとしたらこの時期。こうなりますという説明会ではなく、あくまでも認識の共有と検討してきたことの説明。

池谷：ここでの方向性は、私たちが情報や議論や見聞きしたことを積み重ねてきた結果導き出したこと。何も知識がない中でただ話し合うと、施設はこうあるべきとか地元の学校がなくなってしまうんじゃないかという単純な話になってしまう。これからの教育が子供たちのためにどうあるべきかということをもみんなで話そうとしないと難しい。それよりも私たちがこれまで議論してきたことを市民がどう思うか確認する場にしたい方がいいと思う。榛原地区と相良地区を分けるのが気になる。別の文化を持った人をまぜるほうが新しい考えが生まれるんじゃないかと思う。時間も短い。

橋山：会場を分けるのは市民が足を運ぶのに配慮してとの事ですか

事務局：榛原相良ということではなく、今後予想される学校と地域の連携の枠組みとして中学校区単位であることと、委員のみなさんができる限り生の声を聞くという点でテーブル数を考えたとき2回に分けることが望ましいと考えたからです。

大石：自治会は保守的な人が多い。子供たちのことを中心に考えられるか。一人の人が自己主張だけにならないよう年代層のバランスも大切。

島田：それでは意見聴取はやる。アンケートは保留。意見交換会は、まずは今までやってきたことを説明すること。これが一番。それについて意見やアイデアを頂く。それをそれぞれの委員が確認し、今後のまとめに活かす。

進め方と時期は事務局と私とで相談させていただいてよいでしょうか。

それでは以上で本日の議論を終了します。事務局に返します。

事務局：意見交換会については委員長と案を作り、皆さんにお示しし意見を頂く方法で調整させていただきます。本日は有難うございました。